

高尾山報

大高尾山 第三十三世貫首
佐藤秀仁僧正晋山式
令和四年 四月六日

令和4年 5月号



横濱香根元講

高尾山報創刊七百号
高尾山中興第三十三世佐藤秀仁貫首晋山記念特集



晋山を祝してくす玉を割る



八王子消防記念会による木遣り



邪気を払い福を招く獅子舞



薬王院に向けて山伏と共に練行が行われた



高尾駅南口で地元の皆様に挨拶をする

高尾山中興第三十三世 佐藤秀仁貫首晋山式

令和四年四月六日(水)



桜の下で稚児と共に練り歩く



地元の方々に温かくお出迎え頂きました

令和四年四月六日、高尾山中興第三十三世貫首佐藤秀仁僧正の晋山式が執り行われました。瑞雲たなびき桜咲き誇る晴れやかな早朝、佐藤貫首は住職を務められております高薬寺から、高尾山より出迎えに訪れた使者と共に、高尾山麓まで大勢の方に見守られて練行を行いました。

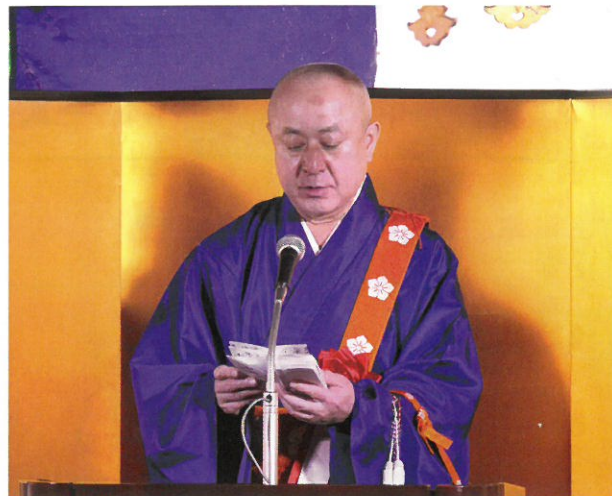
した。道中では熊野神社や氷川神社など、各所の神仏に晋山を奉告し法楽を上げられました。佐藤貫首は高尾駅南口では集まった地元の人々に、「私は高尾の地で育ち、大勢の人に見守られてきました。恐らく薬王院の貫首としては、初めての高尾出身者です。今後も皆様と共に歩

んでいきます」と挨拶されました。山麓到着後には各地で修行を積んだ山伏の法螺の音に先導され、稚児や薬王院総代と合流し、共に高尾山商店街を練行して、高尾登山電鉄や、八王子消防記念会の皆様をはじめ、大勢の方々にお出迎え頂き、清滝駅に到着しました。

清滝駅前では、晋山を記念する式典が行われました。法楽の後、八王子消防記念会による木遣りと高尾五丁目町会による奉納獅子舞が行われ、佐藤貫首が最後にくす玉を割り、ご挨拶の後、山上に向かいました。その後高尾山上駅から練行を再開し、大本坊に到着致しました。



大本堂へと向かう佐藤貫首



芙蓉宗務総長による祝辞



各地で修行を積んだ山伏の法螺の音が響く



高尾山薬王院総代の皆様



御臨席の諸大徳

晋山奉告法要厳修

於：大本堂



至心に祈る佐藤貫首

山麓より到着後、大本堂において、高尾山中興第三十三世佐藤秀仁貫首の晋山の儀・晋山奉告法要が執り行われました。先導山伏衆の法螺の音が境内に響く中、佐藤貫首は威儀を正して大玄関より出立し、職衆と共に毅然とした面持ちで大本堂まで歩みを進められました。大本堂内には、真言宗

智山派管長・布施浄慧化主猊下、大本山成田山新勝寺・岸田照泰貫首、大本山川崎大師平間寺・藤田隆乘貫首、別格本山高幡山金剛寺・杉田純一貫主、別格本山大須観音・岡部快圓貫主名代・岡部快雅僧正、真言宗智山派・芙蓉良英宗務総長をはじめとした内局御一同、さらには集



左より成田山岸田貫首、当山貫首、布施管長猊下、川崎大師藤田貫首

議・菩提院結衆の皆様、法類、法縁の諸大徳、高尾山薬王院総代、京王電鉄株式会社永田会長、高尾登山電鉄船江社長の御臨席を賜り、晋山式が挙行されました。はじめに佐藤貫首が、悠然と傳燈奉告文を讀み上げ御本尊飯繩大権現様へ晋山の奉告を奏上、続いて法灯の継承を誓う

特別開帳大護摩供を厳修されました。次に芙蓉宗務総長より祝辞を賜った後、佐藤貫首が謝辞を述べ、「大山前貫首より授かった勇猛精進の教えを継承し、愛山護法の精神を伝え、実修実証して参ります」と挨拶され、晋山奉告法要はつつがなく終了致しました。

晋山式傳燈奉告

勇猛精進の教えを胸に法灯の継承を誓う



佐藤貫首が御本尊飯繩大権現御宝前にて傳燈奉告文を読み上げる

東京都出身、昭和四十五年（一九七〇）九月十七日生まれ。

平成二年大本山成田山勸学院卒業。同年大本山高尾山薬王院入山。入山後は高尾山修験道の更なる発展のため山伏修行に邁進。真言宗醍醐派総本山醍醐寺の門を叩き、醍醐派の青年会に所属。「三寶院門跡大峯山花供入峰先駆修行」と「大峯山奥駈修行大先達」の称号を与えられた。

また、智山派青年会の修験道行事の際にはオプザーバーとして各地域へ出向。特に東日本大震災被災地では、岩手県宮古市、宮城県石巻市などで柴燈護摩火渡りを指導。

修験道の伝わらない沖繩の地に於いても入峰修行の指導及び先達として沖繩本島に位置する日本最南端の靈山に登

り、柴燈護摩火渡りの指導や法螺貝の伝授を行うなど験門の繁栄に力を尽くす。

同時に、地域社会に寄与すべく矯正活動にも情熱を傾注し、平成十五年から多摩少年院の少年達を高尾山に招いて参道の清掃を行い、座談会などをする集団教誨を行っており、教誨師や保護司を務めている。

薬王院では法務課長、教務部長、執事を歴任。令和二年十二月一日薬王院貫首に就任。

院外においては総本山智積院菩提院結衆、宗機顧問、三寶院門跡大峯山奥駈修行大先達、八王子保護司会顧問、国際ロータリー二七五〇地区東京八王子南ロータリークラブ会員、八王子薬物乱用防止推進委員会委員、日本遺産推進委員、八王子車人形後援会長などの役職を務める。

傳燈奉告文

謹み敬つて真言教主摩訶毘留遮那仏理智不二界会諸尊聖衆殊に別いては開山本尊業師瑠璃光如来 中興本尊飯繩大権現 満山護法諸天善神別しては真言高祖弘法大師中興覺鑊尊師 當山中興俊源大徳 普現色身神変大菩薩當山歴代祖師先徳 総じては盡空法界一切三寶の境界に白して言うさく

抑々當山は今を去る一千二百有余年聖武天皇の天平十六年行基菩薩 勅を奉じて當院を建立し本尊業師如来を安置し賜えりその後物変わり星移り永和年間山城の国宇治の里醍醐山より俊源大徳来たつて當山の興隆を祈り八千枚の護摩供秘法を嚴修し飯繩大権現を感得せらる

夫れ飯繩大権現と者不動明王の化身にして慈悲奴僕の本誓を垂れ賜い末世の福徳薄く諸病に苦しむ者を 救わんが為に権化の威光益々盛んにして遍く衆庶を照らし仏果を証得せしむ伏して惟みるに歴史の星霜は当山をして再三に伽藍荒廢 災禍に遭遇せしむといえども都度復興に励み歴代先師連綿と法灯を相伝え今日に及ぶ

殊に近世大本山一世山本秀順大和上は戦後混乱期 を脱しつつある昭和二十七年に当山を董するに及びて意を専ら寺門興隆に尽瘁して止むごと無し然れども昭和三十四年伊勢湾台風の猛威に抗する事能わずして山内の大杉凡そ三千本が倒木 境内諸堂に甚大な被害を蒙る爾来 山内復興の難事業に尽瘁せらる

然るに昭和四十一年またしても一陣の大嵐峰を巻き来て吹き襲う為に堂宇忽ちに倒壊し その惨状は見るに堪えざるところなり 斯くに及びて山内の惨状を嘆ずるや否や山本山主寺門再興山容整備の大願氣鋭にして熱意に燃ゆ

しかのみならず檀信徒はもとより山麓地域住民 愛山の念奮起し奉り一丸となりて倒木撤去奉仕作業に勤しみ復興愈々促進にして諸堂再建に挑む

されば十方有縁檀信徒諸衆の翕然戮力協心に及び募財につとめしところ淨財忽ちにして蔵に満ち復興山容整備事業の悲願漸く完遂

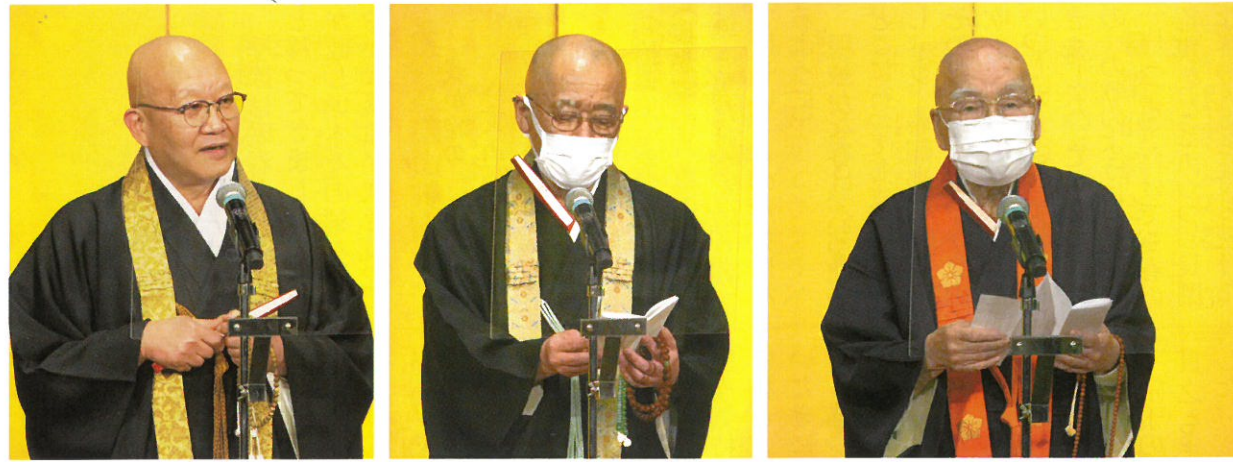
せらるは山本貫首の功業と仰ぐべきところなりといえども賛助せる檀信徒一同の信心結晶としてこの尊し淨行永く山史に止めるべきものも平成五年勝縁の招くところ大山隆玄貫首入りて三十二世の法灯を継承するや山内諸堂莊嚴に粉骨碎身の勞を惜しまずされば飯繩権現堂平成の大修復事業及び諸堂建立等無魔円成せられ輪輿の美相整う

然のみならず大山貫首は高尾山修験道繁栄の誓願烈々として心魂を傾注し「山川草木は皆是遮那の真体にして嶺嵐谷響は 悉く法身の説法也勇猛精進を真言行者の本分とせよ」との大山山主の教風を仰ぎ一山未だ響きに應ずるが如く求道心沛然として起こり野に伏し山に伏し抖擻修行の要道を拓き験門の徳光高尾の峰に燦然として輝く 茲に末資秀仁計らざりき先徳の余光と大山貫首の余沢を蒙りて

当山第三十三世の法脈の継承に覚悟を決す 親れば夫れ新緑全山に滴る本日吉辰を卜して晋山の儀を修するにあたり真言宗智山派化主猊下御臨鑑を仰ぎ奉り更には御両山貫首をはじめ宗内諸大徳の來臨を忝のうし身の曼荼を莊嚴し恭しく宝前へ奉告し奉る

本より徳薄く才乏し内に顧みて忸怩たること能わざると雖も峯に培う実修実証の精誠をもつて範を先師の愛山護法の念に学び 寺門興隆 験門繁栄 檀徒教導に奮迅の精進をせんと欲す 仰ぎ願わくは本尊聖者をはじめ奉り諸大眷属 両大師當山祖師先徳末資が至誠を知見照覽して摂化衆生の勝益を施し給え 伏して乞う

仏法興隆 験門繁栄 万国和平 国土安穩 殊には 一天四海 風雨順時 五穀豊穰 信徒快樂 乃至法界 平等利益 惟時令和四年四月六日 大本山高尾山薬王院 中興第三十三世貫首 秀仁敬白



川崎大師藤田隆乘貫首

成田山岸田照泰貫首

布施浄慧猊下より御垂辞を賜る



御来賓による開運を願う鏡開き



謝辞を述べる落合龍太郎筆頭総代 司会の齊木浩子さん



北山たけしさんの熱唱に合わせて八王子車人形西川古柳座と八王子芸妓衆が舞う

暖かい祝福の中で

晋山祝賀会

於・京王プラザホテル



佐藤貫首による謝辞

高尾山上における晋山奉告法要がつながり、終了した後、会場を新宿の京王プラザホテルに移し、五百余名にも及ぶ大勢の方々ご出席のもと、佐藤貫首の御晋山をお祝いしました。司会は薬王院篤信者の、仙台市の齊木浩子さんにお願ひ致しました。

高尾山上における晋山奉告法要がつながり、終了した後、会場を新宿の京王プラザホテルに移し、五百余名にも及ぶ大勢の方々ご出席のもと、佐藤貫首の御晋山をお祝いしました。司会は薬王院篤信者の、仙台市の齊木浩子さんにお願ひ致しました。

された、八王子車人形・西川古柳座による祝福の舞である「三番叟」の披露が始まりました。演舞の後、佐藤貫首が法螺貝に先導されて入場し、高尾山薬王院の保立允総代が開式の辞を述べ、高尾山法類会の細萱仙秀僧正が新貫首を紹介され、開式となりました。

開式後はご来賓の真言宗智山派管長・布施浄慧猊下、成田山新勝寺・岸田照泰貫首、東京多摩教区長・石黒忠雅僧正、萩生田光一経済産業大臣御名代、石森孝志八王子市長、最後に高尾山慶賛会会長であり、八王子観光コンベンション協会の大野彰会長による祝辞、続いて佐藤貫首よりご参列の皆様へ情熱の込める謝辞が述べられました。次に、鏡開きが行われ、川崎大師平間寺・藤田隆乘貫首より乾杯のご発声を頂きました。祝宴では、八王子芸妓



大勢の方々に祝福を頂きました

衆による祝いの演舞の披露、演歌界の大御所北島三郎さんの御名代として北山たけしさんが、北島さんの代表曲「まつり」と「高尾山」を熱唱されました。その後、友人代表として元職員の方から、放光寺清雲俊雄僧正からの祝辞、高尾山薬王院の落合龍太郎筆頭総代による謝辞と続き、最後に薬王院菅谷執事長が開式の辞を述べ、祝賀会は盛会のうちに終了致しました。

夏遊高尾山神護寺
 空海雕刻不動躬
 寛朝從令移阪東
 参拜成田敬求印
 住持謹看符號紅

西国四十九薬師霊場巡礼

紅葉の
 たかや麗し 青葉かふる
 むみら・楓もまた麗しき

夏、高尾山神護寺に遊ぶ

空海様は此の寺に不動明王像を彫刻なされる…

寛朝大僧正は天皇の命令にて、お像を東国に移転なされる…

成田山に参拝し謹み敬ひて

御朱印を求む…

ご住職様は、御朱印帖上での

千百年ぶりのご対面粋な計らひ

に感涙なされる…

目借時戦さ許さずウクライナ
 波多野 重雄

晩春の季語に「蛙の目借り時」がある。蛙が人の目を借りていつてしまうので、人は眠くなるといふ。八王子では、昔からお寺の蛙合戦がよく言われていた。

春の麗らかな陽気に良くうたた寝して、母親に起こされた思い出がある。

「蛙になど貸せぬ目を睡るなり」野路斎子。

この好期にウクライナ人の安穩秩序を諍つてこそ、国の安全があることは云う迄もない。ウクライナと言えは遠方に聞こえるが、私の兄はソ連抑留帰還兵で身近に感じる。ロシアの動きを凝視して一日も早く世界平和が来ることを切望する。

(高尾山健康登山の会会長)

折り折りの記 (153)

波多野 重雄

目借時戦さ許さずウクライナ

「ありがた迷惑」と受け取られてしまう場合もあるかも知れません。どのようになれば、自分以外の気持ちと理解できるようになるのでしょうか。

「心配」という言葉があります。「心配り」に当てた漢字を音読したもので、「心遣い」や「気遣い」を表します。古くは「心しらひ」と呼ばれ、例えば『源氏物語』『葵』に「思ひやり心しらひて」(注意深く心遣いをして)と見ることが出来ます。相手を気に掛ける「心配り」は「心施」の教えとも通じるところがあるような気がします。

こうした気配りをめぐっては、次のような話が伝わっています。

平等院僧正行尊(一〇五七〜一二三五)は、仏道で尊いお方というだけではなく、世間の事柄にも心が行き届いていました。

鳥羽院(一一〇三〜一一五六)の御持僧として仕えていた時のこと。内裏

(天皇の住居)で管絃の遊びが始まり、琵琶や箏の琴などさまざま楽器を演奏する人々が召されました。

会の中頃になって、左大臣が弾いていた琵琶の緒が切れてしまいました。すると行尊は懐から琵琶の緒を取り出して差し上げました。そのお陰で、左大臣は一晚中奏でることができたのでした。

これは昔、宇多法皇(八六七〜九三二)の御幸(外出)の日に、藤原定国(八六六〜九〇一)という貴族が、烏帽子(男性の冠物)を落とし、てしまい、如無僧都(八六七〜九三八)という僧侶が、持っていた箱から別の烏帽子を取り出したと伝わりますが、行尊の心配りは、それに劣らないほどの奥ゆかしい逸話と言えます。

(『十訓抄』)

行尊の細やかな配慮は、日々の仏道修行によって培われたものなのではないでしょうか。他人の苦し

みは自身の悲しみ、他人の楽しみは自身の喜びという思いが、行尊の心の鏡を磨いていたのかもしれない。清らかな慈悲心から放たれた眼差しや表情、言葉や振る舞いは、さぞかし美しく麗しいものであったと想像されます。

四海の民を、思ひやるに、われ、ひとり暖かなるべからず。

(世の中の人を思いやれば、私一人だけが暖かにしては行かない) 一生に一度の出会いと心得ることを「一期一会」と言います。二度と巡つてこない瞬間に相手と誠心誠意語り合えば、やがてお互いの心根(心の底)が灰見えてくるでしょう。宗子と貫之が心を通わせたように、私も周りのあらゆる声に耳を傾けつつ、心からの慈しみを抱いていきたいと思

(栃木北部教区普濟寺)

法の水茎

大正大学講師 高橋 秀城

(119)

季節は晩春から初夏へと移ってきました。新緑が眩しい木々の梢を、爽やかな薫風が吹き渡っています。

我が宿の
 八重山吹は
 一重だに
 散り残らん
 春の形見に

「拾遺集」よみ人しらす
 (我が家の八重山吹の花は、一重だけでも散り残ってほしい。春の形見になるように)

穏やかな春は、いつたどこに行ってしまったのでしょうか。春爛漫の記憶はそのままに、鮮やかな山吹も、高貴な藤の花も、いつしか色あせて散りゆきました。この「我が宿の」の歌のように、せめて一片(一重)だけでも春の名残をとどめつつ、長閑な春の人心を持ち続けた

いと念じます。平安時代に、源宗子(？九四〇)という貴族が、歌人の紀貫之(八六六〜九四五)に歌を贈りました。

よそにても
 思ふ心は
 変はらねど
 相見ぬ時は
 恋しかりけり

(遠くに行ってもあなたを思う気持ちは変わらなけれど、お目にかかれないうときにはいつそ慕わしく感じられます)

お互いに、しばらく顔を合わせなかつたのでしようか。離れていても貫之のもとへと憧れ出ずる心が、一人の時間によってさらに募っているかのようです。

宗子の思いを受けて、貫之もまた歌を返しました。

桜散り
 卯の花もまた
 咲きぬれば
 心ざしには
 春夏もなし

(『貫之集』)

「桜が散って、卯の花がまた咲いたので、あなたに寄せる思いには春も夏もありませぬよ」

「卯の花」の「卯」には、「憂し」(つらい)という意味も掛けられているのでしょうか。この「桜散り」の歌には、桜から卯の花へと季節は移るっても、あなたに会えない苦しさ

と好意は変わらないという思いが詠み込まれています。冒頭の「一重」ではありませんが、相手を一途に思い込む心を「偏心」と言います。宗子の心を汲み取り、貫之がその偏心に巧みに唱和した歌と言えるでしょう。

今回は、こうした「心」をめぐる布施行について書いてみたいと思えます。「無財の七施」の五つ目は「心施」という教えです。「人々に喜びを



初夏を迎え爽やかな薫風が吹き渡る

与え、苦しみを取り去るという慈悲の心」です。

「心施」について、「無財の七施」を説く『雑宝藏経』には「以上の事を供養すと雖も、心和善せざれば施と名付けず。善心和善し、深く供養を生ずれば、これを心施と名付く」と見えます。「以上の事」というのは、これまで取り上げた「無財の七施」のうち「眼施」「和顔悦色施」「言辞施」「身施」の四つを指すのでしよう。心が「和

善(善良)でなければ、行動を起こしたとしても「施」とは言わず、「善心和善(清らかな慈悲心)」による深い供養(奉仕)を行ったときに「心施」となると説いています。自らの「善心」と結びつかなければ、それは表面的なものとなってしまいうという戒めでしょう。

とは言うものの、自分だけが良かれと思つて行動しても「独り善がり」となつてしまいます。時には親切心が仇となつて



大本堂にて熱禱する佐藤貫首



八王子消防記念会が勇ましく纏を振る



有喜苑における柴燈大護摩供



八王子市の姉妹都市である
苫小牧市より訪れた「風の会」の皆様



大本堂内で御詠歌を奉詠する高尾山御詠歌講

子供たちが健やかに暮らせる世界を願い
春季大祭奉修
四月十七日(日)



健やかな成長を願いお祈りをする



氷川神社獅子舞保存会による
厄祓いの奉納獅子舞



侍装束に扮し練り歩く高尾山慶賛会の皆様



絹太鼓保存会による太鼓の音が響く

観音菩薩の宗教

53

国際教養大学特任教授 金岡秀郎

観音菩薩の転生者としての聖徳太子

(その16)

前号に見たように、中国南北朝の宝誌和尚が書いたとされる『邪馬台詩』は、仏菩薩の助けを得て吉備真備により解読され、日本にもたらされたこととされる。その内容は日本の終末を予言するなど、合理を超えた解釈がなされ弘まった。伝説によれば、観音菩薩の化身と信ぜられた宝誌は日本に来て、神道の神々と仏教を結びつける役割も果たしたといわれる。中世と定義される院政期から鎌倉期には、『邪馬台詩』を先駆けとして、予言および予言書が流行することになった。こうした背景のもと、夙に予言者としての尊崇を享けていた聖徳太子もまた、予言書を残したとされた。それが聖徳太子の『未来記』と総称される多くの文献群である。それらの中には、藤原家倫所持本『聖徳太子未来記』五十巻のように、そのタイトルのみが知られるも「未発見」のものや、他書に引用された文で知られるものが含まれる（小峯和明『予言文学の語る中世』）。

これまで見てきたように、聖徳太子は『日本書紀』などでも異能の人を示唆する記述があるが、平安時代の『聖徳太子伝暦』以来、観音菩薩の化身にして超人的能力を有する人物であることが強調された。その能力のひとつが未来を予知、予

言することで、『未来記』はその集成と捉えられた。太子の予知能力は『日本書紀』にある「兼知未然（兼ねて未然を知る）」以来、種々に増幅され、中世にはさまざまな書名のもと、太子の『未来記』と認知されるようになった。そのため、『未来記』なども記されている（同）。聖徳太子の『未来記』もまた、『邪馬台詩』同様、土中から発掘されたとするなど、ミステリアスに登場する。当初は太子廟や四天王寺に限定されていたものが、仁和寺蔵『聖徳太子未来記』など、「あちこちから発見され、読まれ書写されていくようになった（同）。それは機能上、タイムカプセルに等しい」とも評されている（同）。まさに日本におけるテルマ（チベットの埋蔵経典）といってもよい。

例えば、鎌倉期の『古事談』五には、天喜二年（一〇五四）九月二十日、聖徳太子廟の付近で石塔を建てるため地を掘っていたところ、地中から箱形の石が出現し、そこに太子の銘文があったと述べられている（同）。それによれば、太子は自らの死後、千四百三十余年にこの記文が出現することを予言していたという。天喜二年は実際には太子薨去後、四二六年後であるが、その文は太子の予言とされた。

余論であるが、こうした記述を見ると筆者は現・ロシア領のブリヤート・モンゴルに実在した学僧のダシドルジ・イトウゲル（二八五二―一九二七）を想起する。彼は僧籍としてはハンボ（住職）と称されたが、先代の学僧から転生した活仏（生き仏）と同様に崇拝されてきた。ブリヤートとは、ロシア連邦に併合された北部モンゴル人の居住地で、世界最北の仏教圏である。その地で活躍したダシドルジ・イトウゲルは、遷化に際して「これから過酷な政治により仏教は弾圧されるが、七十五年後には良い時が来る。その時に私の体を掘り起こせば、再び衆生の前に姿を現すであろう」との予言を遺した。仏教が弾圧さ



生前のダシドルジ・イトウゲルの姿

れるとは社会主義ソ連による仏教弾圧を指し、七十五年後とは民主化による宗教の解禁を指す。実際、遷化後七十五年の二〇〇二年に彼の墓所を掘ると、柔軟性を保ち保湿されたままの遺体が坐禅した姿で現れた。それを知った人々は、その遺体をミイラ仏として参拝するようになった。筆者も当地を訪ねて特別の許可の下、そのミイラ仏を間近で拝観したが、まったく腐敗していない肌やふくよかな肉付きはまるで生けるがごとくであった。ロシア人の医学者たちの論文でも、きわめて異例のこととして注目されている。二〇〇八年、その身体は再び埋葬された（金岡秀郎『モンゴルを知るための65章』明石書店）。ダシドルジ・イトウゲルの生前における未来世界の予言、自らの死後に関する予言と奇跡的な再発見などは、聖徳太子と通底する。それらは予言者に共

通する特色といえよう。そもそも予言とは仏の超人的能力のひとつでもあり、予言者には仏や菩薩に通ずる属性が求められる。ダシドルジ・イトウゲルは活仏であり、聖徳太子は観音菩薩の化身である。小峯和明によれば、聖徳太子は仏教の宣揚者と俗世の指導者のふたつの側面を一身に有し、「仏法王法相依を二個人で体現した存在」であった（小峯和明、前掲書）。換言すれば、宗教的指導者であるとともに現実の政治指導者であることである。活仏もまた、ダライ・ラマをはじめ歴史的には聖俗の指導者であり、仏法王法相依を兼ねる存在であった。さらに、聖徳太子は『邪馬台詩』作者の宝誌和尚と同様、観音菩薩の化身とされ、これは「太子」菩薩／天皇Ⅱ仏という図式にも当てはまる（同）。そのことが太子をして予言者たらしむる要因となった。小峯はこれをもって「今

は天皇ではなく、将来天皇になることが確約された『太子』こそ、未来を託しうる恰好の存在だった」と述べている（同）。

聖徳太子の予言、あるいは種々の『未来記』は前掲の厳密な研究書のみならず、通俗的な書籍やネット情報も含めて現在なお人々の関心呼び起している。多くのメディアアを巻き込み大ベストセラーとなった五島勉『ノストラダムスの大予言』（祥伝社、一九七三年）の規模には及ぶべくもないが、太子の予言も地味ながら現在なお千年を優に超える命脈を保っている。そうしたなか、ここでは最も有名な実例として、南北朝時代の武将・楠木正成が聖徳太子の予言を読んだとされる逸話を紹介したい。出典は軍記物語の『太平記』（一三七一）の巻五「正成天王寺未来記」に見る（『古典文学体系』34『太平記』一、岩波書店、一九六〇）である。

時は南北朝。天皇家は京都の北朝と吉野の南朝に分かれて対立し、いづれが即位するかについて鎌倉幕府は大いに発言権を持っていた。皇室や公家からすれば、皇位に對する幕府の介入である。これを憂慮した南朝の後醍醐天皇は、天皇親政を実現すべく倒幕の兵を挙げた。それに呼応したのが楠木正成である。正成は戦の行く末を案じて、聖徳太子ゆかりの四天王寺に伝わる太子の『未来記』の予言を読もうと同寺を訪れた。正成は般若経転読の布施として「白鞍置タル馬、白輻輪の太刀、鎧二両副テ引進ス」とある。その後、宿老の寺僧（経験を積んだ僧侶）に太子『未来記』の閲覧を依頼した。以下、その時の正成と寺僧との会話の一部である。なお、引用に当たって原文にある返り点は省略した。

「（前略）誠ヤラン傳承レバ、上宮太子の當初、百王治天ノ安危ヲ勘テ、日本一州ノ未來記ヲ書置セ給テ候ナル。拜見若不苦候ハズ、今ノ時ニ當リ候ハン巻許、一見仕候バヤ」ト云ケレバ、宿老ノ寺僧ノ答テ云、

「太子守屋ノ逆臣ヲ討テ、始テ此寺ヲ建テ、佛法ヲ被弘候シ後、神代ヨリ始テ、持統天皇ノ御宇ニ至マテヲ被記タル書三十卷ヲバ、前代舊事本記トテ、ト部ノ宿祢是ヲ相傳シテ有職ノ家ヲ立候。其外ニ又一卷ノ秘書ヲ被留テ候。是ハ持統天皇以來末世代々ノ王業、天下ノ治亂ヲ被記テ候。是ヲハ輒ク人ノ披見スル事ハ候ハネ共、以別儀密力ニ見參ニ入候ベシ」トテ、即秘府ノ銀鑰ヲ開テ、金軸ノ書一卷ヲ取出セリ。正成悦テ則是ヲ披覽スルニ不思議ノ記文一段アリ。其文ニ云ク、

紙幅が尽きたので、現代語訳とこれに続く正成が読んだ『未来記』の内容については次号に譲る。

いけばなは草木の美しさ、生命を感じて、それを自分なりに表現していくものです。

一方で池坊には五百年以上の歴史があり、時代時代の美しさが伝えられています。今回は池坊に伝わる『挿花百規』という作品集を参考に作品を生けてみました。

今回は柳と椿を使って作品を整えてみました。見事な枝垂れと、きれいな蕾をつける柳が手に入ったので、一本の枝で真と副を作り出しています。枝垂れを生かすために、サイズが大きくなっている柳は、大籠を使い全体的なバランスを取っています。根締めも高めにすることで、ダイナミックな柳をしっかりと受け止めています。



花材：柳、椿

いけばなの心 27

華道教授 佐藤 宗明

今回参考にした『挿花百規』は江戸時代にできた作品集です。そのため、

生花ではあるのですが、現在とは生け方が微妙に変わっています。美しさには時代と共に流行するものがある一方で変わらないものもあります。日本人が感じる変わらない美しさを感じて頂ければ幸いです。

高尾山登山者安全祈願祭厳修

四月二日(土)

四月二日(土)、高尾山登山電鉄清滝駅前において、高尾山へ訪れる方々の安全や疫病退散等の諸願成就を願う、「登山者安全祈願祭」が行われました。満開の桜の中で伊勢丹立川支店の皆様や、高尾山商店会の関係者が参列し、飯縄権現遥拝社御宝前にて佐藤貫首導師のもと、高尾山へ参拝や登山される方々の安全を祈る法楽があげられました。

その後、ケーブルカー清滝駅前に移動して柴燈大護摩供を厳修し、来山者の安全と共に、新型コロナウイルスによる感染症流行が終息し、安心して高尾山を訪れる日々が戻ってくるよう、参列の関係者一同と共に祈念されました。



飯縄権現遥拝社において法楽をお勤めする



訪れた人々が安全に高尾山に登れるように祈念する

開瀑式厳修

四月一日(金)

高尾山には、蛇滝と琵琶滝という二つの水行道場があり、毎年四月一日に、一年間の安全を祈願する開瀑式が行われます。



蛇滝(左)と琵琶滝(右)で滝行の安全を祈願する

花まつり(釈尊降誕会)

四月三日(日)・八日(金)

お釈迦様生誕の日と伝わる四月八日には、日本各地でお釈迦様の誕生を祝福する、「花まつり」が行われております。

高尾山有喜苑には、昭和六年(一九三三)にタイ王国より日本ボイスカウト連盟が「健児の仏舍利」として拝受した、お釈迦様の真身骨を安置した仏舍利塔があります御縁から、毎年四月の第一日曜日に各地より集まったボイスカウト会員が参列する花まつりが行われており、本年は三日に行われました。

八日には菅谷執事長導師のもと、仏舍利塔において花まつり法要が厳修され、花で飾られた「花御堂」の中に立つお釈迦様の誕生仏に甘茶が注がれました。



お釈迦様の誕生仏に甘茶が注がれる

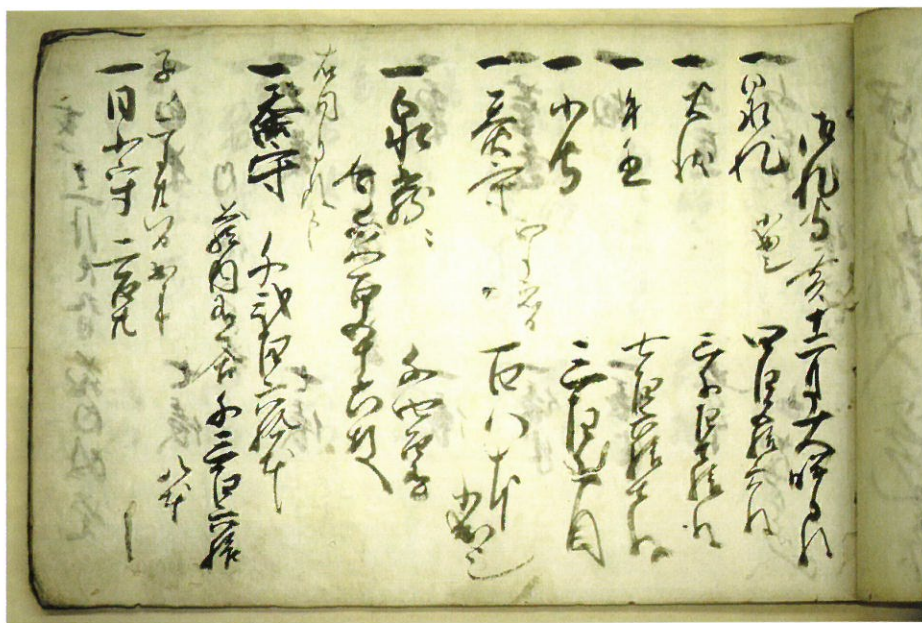
高尾山年代記

歴代山主の事跡をたどる

明治大学博物館 外山 徹

29

十四世秀永6 享保期の高尾山信仰(上)



さまざまな御利益をかかげた御札守の記載(法政大学多摩図書館寄託)

前回は享保三年(二七〇八)に執行された弘法大師御影供の様子を取り上げたが、享保元年からしばらくの間書き継がれた「年々諸用記」という帳面には、この頃の高尾山信仰の具体相を明らかにする記事が見える。

高尾山への参詣者

さかのぼれば、すでに江戸前期の寛永八年(一六三二)九月の段階で、駒木野関所(裏高尾町)の迂回を防ぐ高尾山内通行取締りに係わる文書から、相応の参詣者が存在したことがわかつている。同じ年の春には寺鐘(現存する寛永古鐘)の勧進がおこなわれており、およそ半年後に鐘が錆上りになったペースからすると、近隣のみならず一定のエリアを使者が勧進に回り、そのことが参詣者の発生を促したのかもしれないが、どこからどのくらいの人々が訪れたかは全く不明である。一八世紀に

入り、元禄一七年(二七〇四)以来の永代護摩檀家の発生を考慮すると、江戸と八王子宿周辺が信徒の居住圏となっていたことが考えられる。

さて、「年々諸用記」には、享保元年における月ごとの「参銭」額の記録がある。「参銭」とは「散銭」の当て字か、何れにしても参詣者が奉納した銭貨と考えられる。

| | |
|-----|---|
| 一月 | 三七貫四〇〇文 |
| 二月 | 二四貫四〇〇文 |
| 三月 | 二〇貫三七七文 |
| 四月 | 四八貫三二二文 |
| 五月 | 九貫一〇〇文 |
| 六月 | 三九貫五〇〇文 |
| 七月 | 五〇貫八四四文 |
| 八月 | 一五貫三一八文 |
| 九月 | 三〇貫 八四文 |
| 十月 | 一七貫五〇〇文 |
| 十一月 | 一四貫四〇〇文 |
| 十二月 | 五貫七〇〇文 |
| 合計 | 銭四二貫九四〇文、金に換算して一四二両一分、別に金納三七両二分二朱があつたと末尾に記されている。現在ならどのくらいの金額かという詮索は、例えば米価 |

に換算しても当時の方が米の価値が高いことなどから正確を期しがたいが、月ごとの額面の多寡は注目し値する。

三月が突出しているのは、先述の御影供の関係だろう。前後に比して一月が多いのは、正月の参詣という習慣があつたと考えられる。五月の低調は旧暦では梅雨の時期である。六・七月は夏山登拝の時期となり、ぐっと参詣者も増えたようだ。八月の台風・秋雨の頃に落ち込むが、気候が冷涼に安定する九月にまた増加する。年末にかけては漸減の傾向となる。

護符

「年々諸用記」を繰ってゆくと享保三年四月三日付で「甲州へ紙取りへ遣わしそろう控え」とあつて「上々本判」「上糊入」「下糊入」などという品目と数量、代金を「いつ、や(井筒屋)文左衛門」が受け取った旨の記載がある。「本判」と

は紙の規格として「全紙」の意味だが、「上々」とは等級のことだろう。「糊入」は楮紙に米粉を混入して白くした紙のことと思われる。購入した紙の数量は「百三十束」とあるだけだが、代金の額を考へても相当な枚数のはずである。この上質な紙の購入理由としては、やはり御札の製作に係わるものと推測される。

されるように火を祀る高尾山らしい利益である。季節的にも火で暖を取る頃、火災に注意が必要な時期である。同年四月の記事には「江戸札」「江戸守」として数量を記した部分もあり、江戸は重要な布教先として認識されていたようだ。木造住宅が密集する江戸において火災は日常的な脅威であり、特に火難除の利益が求められていた。

- 「年々諸用記」には享保四年大晦日の御札守の在庫数が記されている。
- 一、泉札 小出し 四百五十六枚
 - 一、火伏 三千百七十枚
 - 一、午王 七百六十七枚
 - 一、小守 三百五目
 - 一、蚕守 正月元日 百八本小出し
 - 一、泉蔵二 千四百有
 - 合千八百五十六枚
 - 右同日改め申しそろう
 - 一、蚕守 千二百六十本
 - 蔵内有合 千三百六十八本
- 数の多きでは「火伏」であるが、護摩行に象徴

「泉」とは水の湧くことからすれば、降雨の利益であろう。高尾山は浅川の流域に位置することから、「水分信仰」の地でもあり、高尾山最寄りの旧家の日記には雨乞い祈禱の記事が度々見られる。同年の六月二十七日付では「合千九百枚有改」という記載もあり、夏場にはかなりの需要があつたようだ。「午王」は「牛王宝印」のことと思われる。神使である鳥を図柄とするため、竹に挟んで田畑に立てる虫害除の護符が一般的だが、高

尾山ではどのような利益とされたか不明である。

「蚕守」は、関東の山間とその山裾の辺りでは養蚕が盛んであり、そこに信仰圏が展開する高尾山の特徴的な利益に関わる護符である。江戸後期の地誌『武蔵名勝図会』(文政三年・一八二〇)には「鼠口留秘符薬王院より出す。鼠、家財を傷ることあるとき、そこへ置けば、必ず出でず。又、養蚕のとき鼠の蚕を食うことあれば、この符にて鼠出でずといえり。」という記事が見える。これらの利益は、高尾山を信仰する人々がどのような生業・立場の人々であつたかを推測させる。

人參の採集

以上の利益を見渡して足りないものは病氣平癒であるが、そもそも薬師如来の祭祀や薬王院の院号からも、病氣を治す利益こそが中心のだったはずで、護摩札がそれに相應する護符であつたこと

は、永代護摩檀家帳の記載から判断できる。「年々諸用記」の中では、

- 秋土用明け十二日 但し、土用より二十日
- 一、和人参取り 西十月十三日

という記事が興味深い。『武蔵名勝図会』に「黒門辺の深谷に」「薬品の草木おのずから生じて、殊に吉野直根と称する人参あり」「この人参の生ずる地は一ヶ所なり」という記述がある。「人参」の一言だけで時代の隔たつた両者の関係を推し測るのは危ういが、気になる事象である。「黒門」とは現在の四天王門の位置にあつた冠木門(黒い角柱のてっぺんに木口の腐朽を防ぐため金属の覆いをかぶせている)のことで、南側の谷底に生えていたということになる。

修験の地大峰山(奈良県)周辺に、吉野人參あるいは直根人參という朝鮮人參と同じく強壯剤としての薬効がある人参の存在が伝えられている。あるいは、高尾山の人参も修験者の往來の過程で移植されたものなのかもしれない。山岳修験の地に薬草を原料とする丸薬が伝わる事例は大峰山の「陀羅尼助丸」や木曾御嶽(長野県)の「百草丸」が知られている。地誌の記事にある薬草が、信徒の間でどのようにやり取りされていたかは不明だが、病氣平癒は高尾山が掲げる一番の利益であり、修験者が伝えた生薬の存在がその大元になつていたのかもしれない。薬王院文書の中には「寿榮丸」という腹痛や頭痛に効くと謳う薬の袋が残り、また、近代以降にも、麓の薬屋が調整した傷薬を薬王院で売っていたという話が伝わっている。

おことわり 本連載では史料の引用について、読みやすく原文に手を加えています。

おはなし散歩道

じいちゃん魚釣りの

柏市 木村 研

しょうくんは、入学式の写真をもって、お父さんとお母さんといっしょにおじいちゃんのおうちにいった。

おじいちゃんのお家は、高尾山の麓にある。

お父さんの車でおじいちゃんのおうちにいくと、おじいちゃんは写真を見て、すぐ部屋にもどってしまった。

おじいちゃん、東京に雪がふった日、すべて転んで、まだ杖をついてあるいている。

お母さんが、おばあちゃんに、「大丈夫ですか？」というと、

「魚釣りに行けないから、きげんが悪くて」と、おばあちゃんが、こまったようにいった。（そうか。じいちゃんは、魚釣りやりたいのか）

しょうくんは、お父さんの車からスケッチブックをとってきて、おじいちゃんのお部屋で描きはじめた。

すると、

「何を描いてるんだい？」とおじいちゃんがいった。

「魚だよ。ほら」

スケッチブックをみせると、おじいちゃんは、

「ほう。うまいもんだ」と、目をほそくした。

「じいちゃん、魚釣りやりたいんでしょ。そんなら、魚釣りしよう」と、しょうくんがいった。

「魚釣りを？」

しょうくんは、はさみで魚をきりぬいて、糸をつかして釣竿もつくって、おじいちゃんといっしょに庭にでて、うそこの魚釣りをはじめた。

おじいちゃんが、苦心してやつと釣りあげたときに、おばあちゃんがいった。「また滑らないでくださいよ。まだ水たまりが残っているんですからね」

おじいちゃんは、急に不機嫌になった。

「もういい」

しょうくんは、釣竿をかえすと、さつさと部屋にもどっていった。

（やっぱ、嘘つこじやだめなのかなあ）

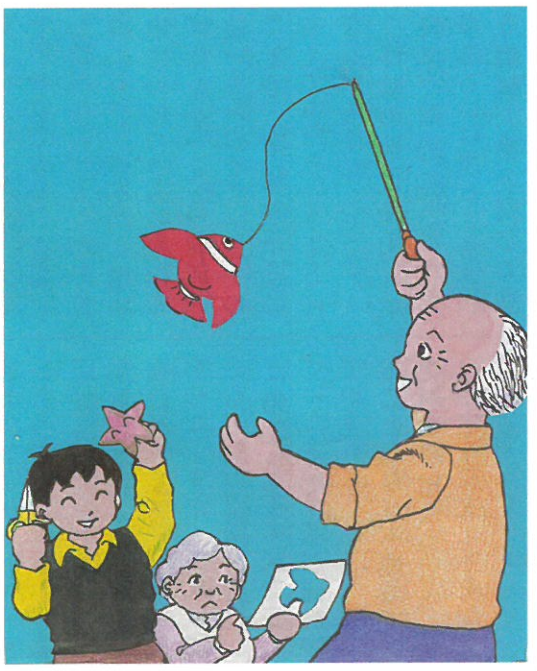
しょうくんは、がっかりして、水たまりをのぞいてみた。水たまりには、白い雲がかんている。

「魚だよ。じいちゃん、本物の魚がいたよ」

しょうくんは、大急ぎでおじいちゃんをよびにいった。

「そんなところに、魚がいるわけないだろう」といいながら、おじいちゃん、しょうくんに引つ張られて、もう一度庭まででてきた。

そして、水たまりをのぞくと、



それに、サバやカレイも。クジラもいるなあ」と、いった。

しょうくんとおじいちゃん、いつまでもいつまでも水たまりをのぞいていた。

それから何日かして、

「今日の日曜日、魚釣りにいくぞ」

とおじいちゃんから電話がかかってきた。

おじいちゃんは、アユも解禁になったことだし、元気になったから、しょうくんにアユを釣って食べさせてやりたいといつて、

河原でバーベキューやる

準備をしているのよ、とおばあちゃんがいった。

しょうくんが、「いいながらお父さんも、子どものころ、じいちゃんといっしょに、よくあゆ釣りにいったなあ」と、はなしはじめた。

「本物の魚釣りだね」

「ああ。本物だ。しょうくんも一年生になったんだから、本物の魚釣りをやってみるか」

「うん。やるやる」

しょうくんが、うれしそうにいった。

（挿し絵・小出 茂）

（終わり）

高尾山物語 49

広庭の建造物

絵・橋本豊治



広庭 四天王門から御札場周辺までは、狭隘な山上でありながら比較的開けているため、「広庭」と呼ばれております。残されている十八世紀末の絵図には、この周囲の景観が伝わっております。

御護摩受付所付近の広庭には多くの建造物が建立されております。俱利伽羅龍王堂

二頭の龍が巻き付いた不動明王の利剣の御姿を取り、貧・瞋・癡の三毒を断ち恋人、友人など、新しい御縁が結ばれると伝わります。

八大龍王像

仏法の守護者であり、金運招福・商売繁盛のご利益があると信仰を集めております。

六根清浄大石車

六根とは眼・耳・鼻・舌・身のいわゆる五感と意（心）を合わせた六感のことです。日々の生活の中で汚れてしまった六根が清らかになるよう、高尾山の神仏にお祈りしてみましよう。

願叶輪潜

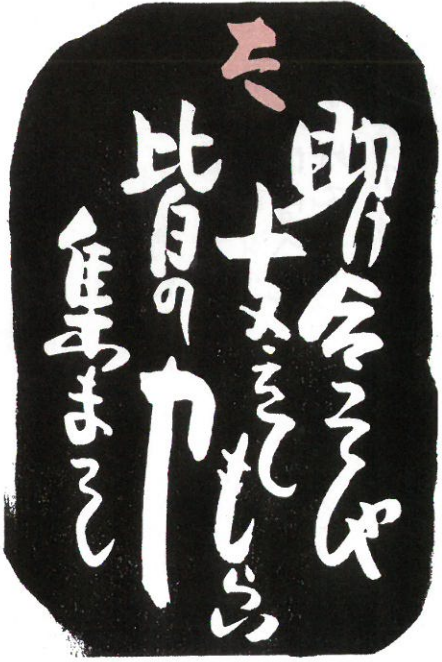
願いが叶いますようにと念じながら、御本尊様の智慧の輪を意味する「輪」を潜ります。

続いて、輪の先にある大錫杖を鳴らしながら、更なる諸願成就を御本尊様にご祈念ください。

いろは

天狗の落とし文

16



た

助け合ってや支えてもらい 皆の力集まると

一人一人の力には限界があります。何をするにも一人では大きなことが出来ないでしょう。大きな目的を達成するためにはチームワーク、すなわちメンバーそれぞれが、目標を達成するために協力する必要があります。お互いの弱点を補完し、全員が共同体となることで、チームとして適切に活動することができるようになるでしょう。

高尾山 季節散歩

暦の言葉 「七十二候」
紅花栄
「べにばなさかう」

五月二十六日～五月三十日頃

文字の通り、紅花の花が咲く頃という意味ですが、現在の暦では紅花は六月末頃に咲き収穫を迎えます。「紅」の文字通り、かつては口紅の原料として生産されておりましたが、現在では紅花油として名前を聞くことが多いかもしれません。

今月の風物詩

時鳥

ホトトギスは渡り鳥であり、五月中旬頃日本に飛来します。鳴き声特徴的であり、「テツペンカケタカ」や「特許許可局」のように聞こえるため、詩歌の題材として詠まれてきました。異名が多く、不如帰、杜鵑、杜宇、蜀魂等があります。

健康登山者投稿作品

季節の絵手紙

八王子市 栃谷 玲子

「シヤガ咲く春の山」



「いろは唄」

いろは唄
いろはにほへと
ちりぬるを
わかよたれそ
つねならむ
うみのおくやま
けふこえて
あさきやめみし
ふじごせすん

花の命は
みじかい
人の命もまた
はかない
有為転変は
此の世の常
（無駄に生きては
もったいないから
精一林生きようとう
いう意味）

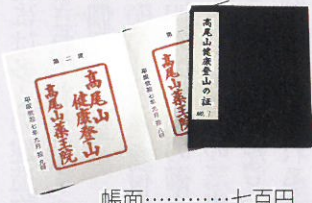
一步一步煩惱滅除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

四段 友人の話は最後まで聞きましょう

耳の痛いことを言う人は本当の友人であると言われております。人の助言を受け入れるのは勇気がいることかもしれませんが、相手は自分のことを本当に大事に思っているのだと感じ、話を最後まで聞いてみましょう。

「高尾山健康登山の証」のお勧め
年間約二百八十万の人々が訪れ、「世界一登山者の多い山」として知られている高尾山。登山者の皆様の励みになれば、との思いから平成十一年から健康登山を始め、今では約五万人の方々が会員となられております。期限はございませんので、御自分のペースでお楽しみ下さい。
また、一冊に付き二十一回スタンプを押すページがあり、終了したことを満行と言います。満行されますとお祝い膳として精進料理の御接待や、健康登山者限定の記念品などと交換もできます。



帳面……………七百元
スタンプ……………百円

第百十九回 高尾山信徒峰中修行会

六月四日(土)

本年は「信徒峰中修行会」を、例年の行程とは異なり、六月四日の深夜未明からその日の夕方にかけての、日帰り行程で開催致します。

夜明け前の厳かで靈気に満ちた高尾山で回峰行を行い、山頂にて御来光を迎え、薬王院で朝勤行や写経、当山眞首による晋山記念法話、また有喜苑での柴燈大護摩供に参加してみませんか。

ケープルカーは利用せず山麓から練行を行います。適宜休憩は設けますが、暗い山道を一定のペースで二時間程度歩く自信のある方のみご参加下さい。また、集合時間は厳守となります。遅刻の場合には対応は致しかねますので、その旨ご了承頂きます。修行会ではマスクの着用等感染症対策を行いますので、参加の皆様にもご協力願います。

※請書は締め切り後に、発送致します。
※体調が優れない時や、不安な時はご参加をお控え下さい。
※当日の天候や状況によって行程変更や中止となる場合がありますので、あらかじめご承知願います。

| 行程 | |
|-------|-------------------|
| 2:00 | 高尾山麓不動院 集合・受付 |
| 2:20 | 回峰行 一号路、各所で法楽 |
| 4:20 | 山頂到着、御来光法楽 |
| 5:30 | 朝勤行(大本堂) |
| 6:30 | 休憩 |
| 7:40 | 朝食(大本坊) |
| 9:00 | 佐藤貫首晋山記念法話 |
| 10:00 | 写経 |
| 11:45 | 昼食(大本坊) |
| 13:00 | 柴燈大護摩供 於・有喜苑仏舎利塔前 |
| 15:00 | 不動院 |
| 15:30 | 解散 |

宛先 〒一九三―八六八六 八王子市高尾町二七七 高尾山薬王院 信徒峰中修行会係宛
電話 〇四二―六六―二二五
募集期間 五月二十七日(必着)
参加費 一万円 *保険料含
定員 三十名(男女不問) *二十歳以上
定員となり次第締め切ります。ホームページでご確認下さい。
集合場所 高尾山麓不動院 午前二時集合
服装 運動着
持参品 運動靴(登山靴可)
雨具(カッパ、ポンチョ) マスク(予備含)、タオル、リュックサック、ヘッドライト、筆記用具
*お持ちの方は、念珠、錫杖をご持参下さい。

お申し込みについて

申込方法は左記いずれかの方法とし、お電話での申込は承りかねます。

- 1 ハガキに必要事項【郵便番号・住所・氏名とふりがな・性別・生年月日・当日連絡のつく携帯電話番号・緊急連絡先(続柄)・アレルギー】を明記してお送り下さい。
- 2 下記のQRコードからお申込み下さい。



●お車でお越しの際には山麓祈禱殿駐車場をご利用頂きます。その他、ご相談のある方は時間内(九時～十六時迄)に信徒峰中修行会係までご連絡下さい。

高尾山報七百号発刊にあたり

高尾山では御信徒の皆様、またご協力頂いた歴史・自然・行事・民俗などの情報を提供するため、昭和三十四年(一九五九)の創刊以来、高尾山報をお届けしております。このたびは歴代御信徒の皆様、またご協力頂いた関係者の方々のお蔭をもちまして、無事に節目となる七百号発刊の運びとなり、深く感謝申し上げます。これからも、高尾山の四季折々の行事や風景を分かりやすくお届けすることを通して、皆様にとつての「心のふるさと」祈りのお山であり続けられるよう、一層の充実を図るべく精進してまいります。今後ともご支援、ご指導、そしてご愛読を賜りますようお願い申し上げます。

高尾山報編集室



登山だより

六月行事日程

一日〜七日

聖天秘供(聖天堂)

九日、二十一日

弁天様御縁日

六日、十四日

御詠歌勉強会

八日

仏舍利詣り(仏舍利塔)

十九日

納札供養柴燈大護摩供

(十三時祈禱殿広場)

二十五日

月例写真会

(十三時山麓不動院)

二十六日

高尾山とんとんむかし

「語り部の会」

(十二時半山麓不動院)

二十八日

奥之院開扉供養

(十時奥之院)

二十一日

飯縄様御縁日

神徳報謝百味飲食供

(九時大本堂)

☆神徳報謝百味飲食供

高尾山御本尊飯縄大権

現様の日々の御加護に感謝

し、沢山の御供物を捧げて

御本尊様威光倍增の為、御

供養申し上げる法要です。

皆様の御志納を受け付

けておりますので、ご希望

の方は大本堂までお申し

出下さい。

尚、法要終了後に百味の

お札を授与致します。

毎月二十二日午前九時勤修

御志納金 一〇三千元以上

高尾山の昆虫

シラホシカミキリ

151

初夏の花や薪に集まる鮮やかな種に、シラホシカミキリがいます。

漢字表記すると白星天牛となり、頭部や前胸は黒色で中央に目立つ白い縦筋があり、上翅は赤褐色でその名のよう白い紋が煌めく星状に散りばめられる、というお洒落な色彩を持ちます。



ガズミの花に來たり、サルナシやノブドウの葉でもよく見られますが、私はタマアジサイでしばしば出会っています。

一般のカミキリの触角は伸ばすと、やや湾曲した形状になりますが、本種の仲間には棒のように直線的なのが印象的です。甲虫でもカブトムシやクワガタのような大型種は、野外で見かけた際に撮影するのは至極簡単ですが、カミキリの仲間は敏捷な種が少なく、本種もその限りではありません。

突然飛來し、慌ただしく動き回ってカメラの焦点を合わせる間もなく飛び去ってしまうことが多く、葉を後食している時がシャッターチャンスとなります。葉に止まり葉脈やその付近を食べ進む線状に食痕を残すので、それを頼りに探すとド派手な色彩コントラストを持つ本種が見つかると思います。

(文松島 孝 撮影上村、雅昭)

高尾山報助成金志納者御芳名(順不同・敬称略)

- 前橋市 (侑野) 口組
- 坂戸市 大塚 一男
- 足利市 荻野 キヨ
- 佐世保市 南 シマコ
- 新座市 彰山 粧麗
- 八王子市 天野 章雄
- さいたま市 大島 美恵子
- 八王子市 春原 啓子
- 小平市 関 道雄
- 富里市 森 照森
- 比企郡 新井 勇
- 八王子市 串田 展子
- 熊谷市 井上 金作
- 千曲市 相原 てる子
- 前橋市 小野 清
- 高尾山健康登山者一同

高尾山薬王院ホームページ
<https://www.takaosan.or.jp>
下記のQRコードから高尾山薬王院のホームページにアクセスできます



発行所
東京都八王子市高尾町2177
大 本 山
高尾山薬王院
郵便番号 193-8686
電話(042)-661-1115(代)
FAX(042)-664-1199
発行人 菅 谷 秀 文
編集人 菅 井 倫 浩
印刷 ヒラツカ印刷社
毎月1回1日発行
1部50円